



放射線リスクコミュニケーション



相談員支援センターだより

地域活性化をめざして
一般社団法人とみおかプラス
まだらめ か お り
移住専門員 班目 佳小里 様



移住専門員のおふたり：写真右が班目さん

東日本大震災による福島第一原子力発電所の事故により、富岡町は全町避難を経験し、現在もさらなる復興を目指した町づくりに取り組んでいます。移住定住の促進は、復興を推し進める重要な施策として位置づけられています。

本号では、復興支援を行う「一般社団法人とみおかプラス」で移住専門員として働く班目さんにお話を伺いました。

——（一社）とみおかプラス（2017年設立）に、班目さんが入職した時期やそのきっかけ等を教えてください。

2023年10月に入職しました。東日本大震災発生時に中学3年生だった私は、進学先で地域活性化事業を学び、復興も視野に入れ、その分野に関わる仕事がしたいと思っていました。卒業後は東京で地域活性に関する仕事に就いていましたが、その間、いつか地元福島県に帰って働きたい思いがあり、5年が経過した頃、妹からとみおかプラスで移住専門員の求人があることを聞き、転職を決断しました。

その学生時代に知り合った県外の方から、震災後数年が経過した時点でも、福島に住んで大丈夫なの？危なくないの？等聞かれた事がありました。原発事故関連の情報が、事故発生時と変わっていない

現実を知り、情報内容に県内在住者との温度差があることを知りました。ですので、情報を正しく伝えたい思いも、地域活性化事業や復興へつながると考えて、移住専門員を選びました。

——「移住専門員」は、団体の「移住定住促進事業」部門の業務とのことですが、具体的な業務内容を教えてください。

「とみおかくらし情報館」の窓口、電話、メール等を通じた移住相談対応のほか、お試し住宅の運営や県外での移住希望者に向けた移住イベントへの出展、サイト・SNS等での広報活動、定住サポートを行っています。

——どのような方が相談にいらっしゃいますか。

移住希望者は、Iターン、Uターン等様々で、比較的若年層が多く、その多くは環境面を重視している傾向があります。環境面とは、子育て施策の充実、都心や仙台方面へのアクセスの良さ、豊かな自然等ですが、いずれにしても町を気に入ってくれている様子を聞くと、とても嬉しくなります。また、移住先を探すにあたり、双葉郡エリアに絞り込んでいる方も相談に来ます。

——相談内容、移住決断の壁になっているもの、また、原発事故起因の相談や不安の声はありますか。

昨年度の相談件数は約150件あります。あと一歩のところまで移住を決断できない方の悩みとして、娯楽や買い物の店舗数が少ない、またお子さんの進学や介護等ご家族の事情があり、踏み切れない方がいます。いずれにしても抱えている問題、悩みは様々です。

放射線については、ほとんどの方に不安はない印象ですが、中には震災や原発事故の記憶が残っている年齢層の方の中に、まだ前を向けない思いを抱えている方もいます。

——東日本大震災から14年が経過した今、注力していること、今後の展望などをお聞かせください。

移住者を増やすことだけでなく、定住化が重要だと考えています。移住相談時に町の住環境のデメリット、足りないことも、きちんと話すようにしています。そのうえで、移住を選択してくれる方は、本当に町を気に入ってくれ、移住後のミスマッチが少ないように感じています。

また、在勤、在住者、富岡町に住民票がある方を対象とした「とみおか町民交流会」や移住者対象の

懇談会を開催し、情報交換、交流の場を設けることで、知人を増やすことが、定住化につながると考えています。

加えて最近では、移住後の相談が増える傾向があります。例えば、起業の悩み、知り合いを作りたいですが、団体が持っているネットワークを利用し、相談者の悩みが解消されるよう、移住後のアフターフォローも丁寧に行っています。

——様々なお話ありがとうございました。

紙面先頭に掲載した写真でお二人が手に持っている移住定住ガイドブックは、「まずは、町の存在を知ってもらわないと移住先の候補にもならないから。」と、手に取ってもらえる、手に取った後もずっと持っていてもらえるようなこだわりが詰まったものになっています。さらに移住定住者が増えることを期待しています。

車座意見交換会の例 福島県立相馬高等学校 福島県立磐城桜が丘高等学校 2校合同

令和7年7月5日、福島県立相馬高等学校、福島県立磐城桜が丘高等学校の生徒を対象に車座意見交換会を実施しました。当日は6名の生徒が中間貯蔵事業情報センターを含む中間貯蔵施設や、震災遺構浪江町立請戸小学校等を見学し、その後、意見交換を行いました。

はじめに、大熊町のCREVA（クレバ）おおくま内にある、中間貯蔵事業情報センターにて、中間貯蔵施設の全体図や見学場所に関する説明を受けました。その後、バスに乗り、中間貯蔵施設内を見学しました。土壌貯蔵施設（大熊③工区）にて一度下車し、放射線測定器を使用して空間線量率を測定し、施設内に設置しているモニタリングポストの数値と比較しました。



中間貯蔵施設見学の様子

見学を通して、除去土壌等の再生利用に関する情報や福島復興・環境再生取組についてより深く学ぶことができました。

途中、大熊町立熊町小学校にも立ち寄りました。震災当時、中間貯蔵施設の見学担当者のお子さんが熊町小学校に通学しており、東日本大震災や原発事故で受けた被害状況について、詳しい話を聞くことができました。また、校舎内には入らず、外観の見学でしたが、教室の机や椅子が散乱したまま放置されている様子や、草木で荒れ果てた校庭を見ることで、原発事故が起きたことによる混乱を改めて感じていました。

次に、震災遺構浪江町立請戸小学校を見学しました。施設内のいたるところで多くの生徒が足を止め、津波の痕跡や展示物をじっくりと見ていました。参加した生徒たちは東日本大震災の記憶があまりない世代であるため、津波により流されてしまった校舎等の見学をすることで、当時の被害状況がいかに大きなものだったかを学び、自然の脅威を実感しているようでした。

その後は、双葉町の浅野燃糸「フタバスーパーゼロミル」の見学を行いました。双葉町への事業進出の経緯や働いている方たちの想いに触れたり、普段見ることができない工場内を見たりすることで、双葉郡の復興の様子を間近で感じ取っていました。

最後にCREVAおおくまに戻り、専門家等を交えながら、グループに分かれて見学を通して感じたことや、誰かに伝えたいと思ったこと等を書き出し、意見交換を行った後、グループごとに発表しました。生徒からは「除去土壌の安全性が分かった。様々な取組が行われていることを他の人にも伝えていかなければならない。」「測定器を使用して空間線量率を測ったことで安全であるということが納得できた。」「除染土壌の安全性が示されているが最終処分場は決まっていない。このような会に参加し、安心安全を体験してもらうことが大切である。」等の意見が挙がりました。除去土壌の県外最終処分や再生利用に関する理解を深め、除去土壌の行き先等について考えることで、直面している課題を自分事として捉える機会となりました。



意見交換の様子

車座意見交換会の例 檜葉町下井出地区 (長泥見学)

福島県双葉郡檜葉町では、月に一回、地区ごとに地域ミニデイ※を開催しています。

昨年度、下井出地区で開催した車座意見交換会において、福島の復興の現状を学ぶ機会を設けたいとの要望が参加者からあがり、地域ミニデイの開催に合わせて、6月13日に飯館村長泥地区にて、環境再生事業関連施設等を見学しました。

飯館村長泥地区では、村内で発生した放射能濃度が5,000Bq/kg以下の除去土壌を異物除去等の工程を経て再生資材化し、盛土を行い、その上に覆土することで農地を盛土造成する事業を行っています。造成された農地では資源作物等を実験的に栽培している様子を見学することができました。



長泥地区（農地造成エリア）見学の様子

長泥地区の環境再生事業エリアを見学した後は、今年4月にオープンした「花の里 ながどろ 環境再生情報ひろば」に移動しました。

施設内には長泥地区で実施している環境再生事業や村や地区の復興への歩み、身の回りの放射線に関する情報がパネルや模型、映像を通して分かりやすく展示されています。

また施設に隣接するビニールハウスでは、多様な花卉（かき）が年間を通して栽培されており、この日はマリーゴールドをはじめとした花々が色鮮やかに咲いていました。

その後、檜葉町地域包括支援センターの小林紀子氏がファシリテーターを務め、和やかで話しやすい雰囲気

気の中で意見交換会を行いました。

長泥地区の見学で知った中間貯蔵施設の現状について、参加者からは「除染をした場所がきれいになっており、農業も安心してできると思った。」「テレビで放送されている様子を見ると、実際に見るのとでは違いがあつて安心することができた。」等の意見が出ました。

また「本日参加して大変勉強になった。今後も勉強して様々なことを知りたい」と意見もあり、参加者が、この地区の復興に向けた状況を他人事とせず、熱心に向き合っていく姿勢を感じることができました。



車座意見交換会の様子

長泥地区は、長い期間、帰還困難区域の一部として立ち入りを厳しく制限されてきました。特定復興再生拠点区域として一部の避難指示は解除されましたが、一部で制限が残るなど、今でも立ち入りにくい場所であることは変わりなく、不安や緊張をもって参加された方もいらっしゃいました。

実際に訪れてみると、静かな山里の光景が広がっており、足を運ぶことで復興への歩みと課題を実感することができました。現地で得た気づきの中で参加者各々が福島の未来について考える一日となりました。

※「地域ミニデイサービス」：地域支援事業の略称

霧箱をご存じですか？

豆知識

～放射線教育支援の現場から～

放射線リスクセンターが実施する放射線教育支援では、主に小学生を対象に「霧箱」を使用して、放射線の飛跡を観察します。小さな箱の中で、様々な形の放射

線の飛跡が飛ぶ様子に、児童は「飛行機雲みたい」と、時折歓声を上げながら興味深そうに見入っています。



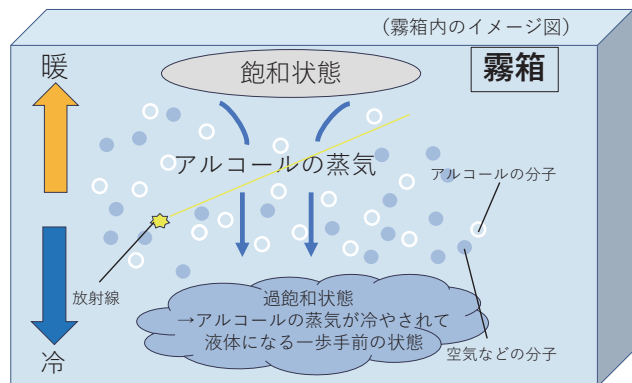
霧箱をのぞき込む児童

霧箱は、1897年にイギリスの物理学者チャールズ・ウィルソン（1927年ノーベル物理学賞受賞）が発明した実験装置で、放射線について研究が始まった当初、様々な実験に使用されました。

霧箱とは、アルコールの過飽和蒸気の中を放射線が通ると、その通り道に沿って飛行機雲のようなアルコールの霧（放射線の飛跡）が観察できる装置です。

もう少し詳しく説明します。箱の中でアルコールを蒸発させ、箱の下部（底部）を冷却し、上部を暖めます。これにより箱内部で上下の温度差が数十℃程度の急激な温度勾配を作ると、箱の上方はアルコール気体の飽和状態、下方には過飽和状態ができます。

アルコール気体の過飽和状態の中を、電荷を持った高速の放射線が通ると、その道筋にある窒素や酸素の気体分子の電子が跳ね飛ばされ、イオンができます。このイオンが核となって飽和状態のアルコール分子が集まり、アルコールの液滴となって雲ができます。この白い飛行機雲のように見えるアルコールの雲に光を当て、放射線の通った跡（飛跡）が観察できるのです。



飛跡のできる方向は、線源を中心とした放射状でしょうか？アルファ線は線源から四方八方に飛び出し

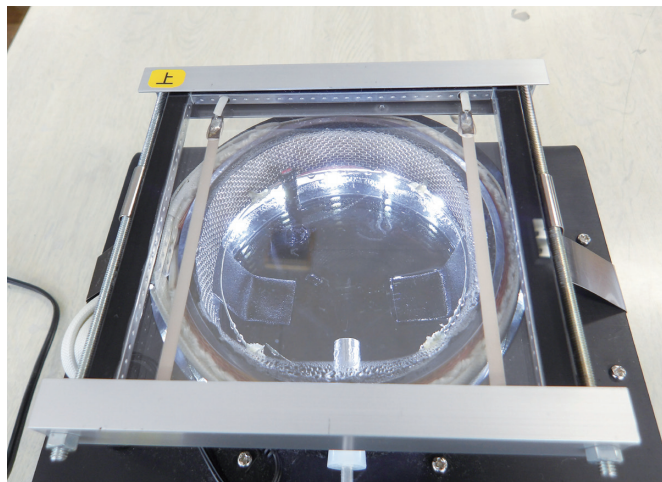
ているため、飛跡も、線源を中心として、放射状にできるはずですが。ところが、飛跡をずっと観察していると、たまに、全く違った方向に出るものや、途中で折れ曲がったものが観測されます。これは、空気中に含まれるラドンや、ラドンが崩壊してできた核種から放出されたもの、原子と衝突して飛ぶ方向が変わってしまったもの、それに、宇宙線が観測されているものと考えられます。

—霧箱で見える放射線の種類—

アルファ線：太く、まっすぐで短い。長さは4cmくらい。

ベータ線：細く、ところどころ曲がっていて、長い。

宇宙線：太く、まっすぐで長い。



放射線リスコミセンターが使用する霧箱
(写真中央下突起部が線源（閃ウラン鉱））

仕組みを理解すると、工夫がたくさん詰まった装置であることが分かります。放射線教育の授業中に霧箱をのぞき込む児童の様子から、直接目に見えない放射線の飛跡を可視化することが、放射線への興味、関心を深める機会となっていると感じています。

なお、本格的な大型霧箱は科学館や博物館にあり、福島県内では、福島県環境創造センター交流棟「コミュタン福島」に設置されています。興味のある方は足を運んで観察してみたいはいかがでしょうか。

放射線リスクコミュニケーション

相談員支援センターだより No.46

発行：放射線リスクコミュニケーション相談員支援センター

連絡先：〒970-8026 いわき市平字小太郎町1-6

いわきセンタービル5階

フリーダイヤル：0120-478-100

FAX：0246-35-5158

E-mail：F-sodan@nsra.or.jp

